

# 子どもからみた両親間のやりとりに関する探索的検討

## ——両親間交流尺度作成の試み——<sup>1)</sup>

筑波大学人間総合科学研究科 廣瀬愛希子<sup>2, 3)</sup>

筑波大学人間系 濱口 佳和

An exploratory study of interparental interactions from child perceptions: Developing a scale of positive interparental interactions

Akiko Hirose (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yoshikazu Hamaguchi (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purposes of this study are to investigate interparental interactions from the child's perspective (Study 1) and to develop a scale of positive interparental interactions (Study 2). Study 1 gathered freely-written, retrospective texts about interparental interactions from undergraduates, which were sorted using the KJ method. Study 2 developed a scale of positive interparental interactions based on the clustering results of Study 1. The positive interparental interactions scale was refined based on a preliminary investigation. Finally, the main investigation was conducted using the scales with adolescents and those results indicate that the scale is both reliable and valid.

**Key words:** interparental relationship, interparental conflict, interparental positive interaction, adolescents

良好な両親関係は、健康的な家族の土台を形成する一方で、両親間の不和や葛藤は、家族問題のリスクにつながり子どもの発達に幅広い悪影響をもたらす (Cummings, Davies, & Campbell, 2000 松浦訳

2006)。昨今は、離婚や面前DVなどの夫婦関係の問題が多く発生しており (厚生労働省, 2020; 警察庁, 2019), 両親関係の問題が子どもの適応におよぼす影響が懸念されている。

1990年代以降、両親関係の子どもへの影響性の研究において、その影響メカニズムを明らかにしようとする動きが活発になっている。このようなプロセス指向的な研究の流れの中で明らかになったのは、両親関係に対する子どもの認知や情緒の重要性である。両親関係に対する子どもの認知や情緒が、両親関係と子どもの適応間を媒介する役割を果たすことが示されるようになり、このことについて理論化が試みられるようになった。その代表的な理論として、認知状況的枠組理論 (cognitive-contextual framework theory; Grych & Fincham, 1990) と情緒的安定性理

- 1) 研究の一部は、日本発達心理学会第30回大会と日本心理学会第84回大会にて発表されたものである。
- 2) 本研究の実施にあたり、筑波大学心理学類の江崎友磨さん、本多ゆりかさん、金子沙樹さん、河田あかりさん、大井聡美さん、沖田龍之介さん、坂戸奎太さん、田丸圭祐さん、常盤みなみさん、早稲田拳さんのご協力をいただきました。重ねてお礼を申し上げます。
- 3) 両親間交流尺度の作成にあたり、ご指導・ご助言を賜りました筑波大学の安藤智子教授に深く感謝申し上げます。

連絡先: [yhama@human.tsukuba.ac.jp](mailto:yhama@human.tsukuba.ac.jp) (濱口佳和)

論 (emotional security theory: 以下, EST とする; Davies & Cummings, 1994) がある。認知状況的枠組理論は, 両親間葛藤に対して, 子どもが脅威や自己非難を認識することで, 適応に悪影響をもたらすと想定する (Grych & Fincham, 1990)。EST は, アタッチメント理論に基づく理論であり, 両親間葛藤が子どもの情緒的安定性を脅かすことで, 子どもの適応を低めるモデルを仮定している (Davies & Cummings, 1994)。

これらの理論に基づく実証的研究は, 欧米を中心になされている。これまでの研究から, 両親間葛藤の中でも, 両親間の高い敵意や葛藤の激しさ, 未解決を特徴とするような破壊的な葛藤 (destructive interparental conflict) が, 子どもの適応に悪影響をおよぼすことが明らかになっている。破壊的葛藤を子どもが認知することは, 子どもの安全・安心の感覚へ脅威をもたらし, 最終的に子どもの内在化・外在化問題や対人関係の問題, 学校不適応, 情動制御の問題といった様々な適応問題につながることを示されている (Davies, Martin, & Sturge-Apple, 2016)。

以上より, 子どもがどのように両親関係を受けとめているかを把握することは, 両親関係の子どもへの影響性を理解する上で非常に重要である。

また, 従来の研究は, 両親関係の中でも両親間葛藤<sup>4)</sup>に焦点が当てられ, 葛藤が子どもの適応へ与える影響が検討されることが主であった。しかし, 近年は, 両親間葛藤だけでなく, 両親関係の全般的な質も子どもの適応にとって重要であることが明らかとなり, 葛藤以外の側面も含めて両親関係の質を把握し, それらが子どもの適応へ与える影響を検討することが求められている (van Eldic et al., 2020)。

夫婦関係は, 結婚に対する総合評価と, その総合評価を規定する説明変数となる諸側面が存在し, それらを分離した上で検討する必要があると指摘されている (伊藤・池田・相良, 2014)。両親関係の子どもへの影響性の検討においても, 両親関係を各側面に分けて検討を行うことは, 影響メカニズム解明の観点から重要であると考えられる。

当分野のメタ分析を行った van Eldic et al. (2020) は, 両親関係が子どもに与える影響を検討するため

に, 両親関係を①関係の質 (relationship quality), ②葛藤の頻度 (frequency of conflicts), ③敵意的行動 (hostile behavior), ④非関与的行動 (disengaged behavior), ⑤建設的行動 (constructive behavior), ⑥子どもに関する葛藤 (child-related conflict) の6つの側面に分けて捉えることが有効であると主張した。①は, 両親間の関係満足度や凝集性, 親密性などの要素に表れる, 両親関係の全般的な関係の質を指し, ②から⑥は, 両親間葛藤の側面を指す。

このように, 昨今は, 両親関係を側面ごとに分けて, どの側面が子どもの適応に影響を与えるかを検討する動きがみられている。しかし, 葛藤以外の両親関係の側面が子どもへ与える影響の検討はまだ十分になされていない。昨今は, 両親関係の全般的な質も子どもの適応にとって重要であることが指摘されているものの (van Eldic et al., 2020), 夫婦関係は, 性役割関係やコミュニケーション関係, 勢力関係, 性関係など様々な側面があり (柏木・平山, 2003), 子どもへの影響性を検討する上で, 両親関係のどの側面を取り扱うべきかは明確になっていない。

以上より, 両親関係の影響性の研究はまだ途上であり, さらなる実証的研究を積み重ねる必要があると指摘されている (van Eldic et al., 2020)。

## わが国の課題および, 子どもの視点からの検討の必要性

一方, わが国の研究状況をみると, 欧米に比べて研究の蓄積は少なく, 研究は遅れている。近年になり, 両親関係の子どもへの影響性についてのいくつかの研究がみられるようになったものの (e.g. 川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤, 2008; 山本・伊藤, 2012), 体系的な研究の流れが確立されていないことや, 日本独自の両親関係を踏まえた検討が不十分であることが課題とされている (大野, 2015)。

わが国の研究が遅れている背景には, 子どもへの影響性を考慮した両親関係に関わる尺度が未整備であることがあげられる。統一的な尺度がないことは, わが国で理論に基づく体系的な研究が進まない原因の一つとなっている。

基準となる両親関係の尺度の確立が求められる一方で, 日本独自の両親関係を踏まえた検討や尺度の作成も求められている (大野, 2015; 山本・伊藤, 2012)。その理由は, 日本は欧米とは異なる独自の夫婦関係があることが指摘されているためである。例えば, 日本独自の夫婦関係として, 「家庭内別居」という言葉に表される情緒的交流が乏しいにも関わらず婚姻関係を続ける夫婦があげられる (大野, 2015)。

4) Cummings, Goke-Morey, & Papp (2003) によると, 両親間葛藤は「肯定的か否定的であるかどうかに関わらず, 両親間の意見の相違に関わるありとあらゆるやりとり (any major or minor interparental interaction that involved a difference of opinion, whether it was mostly negative or even mostly positive)」と定義される。

欧米における研究の多くは、暴力や口論などの外顯的な両親間葛藤を扱っており、「家庭内別居」のような冷めた夫婦関係を測定する尺度や、それが子どもへ与える影響の検討は見当たらない。

上記の例のように、両親関係に関わる代表的な尺度の多くが欧米で作成されたものであるため、わが国の両親関係の測定にはふさわしくない点や不十分な点があることが指摘されている（山本・伊藤, 2012；川島, 2013）。したがって、欧米で使用される両親関係の尺度をわが国で確立させるにあたり、まずはわが国の両親関係のあり方を検討し、その特徴や欧米との違いを明らかにすることが重要であると考えられる。

わが国の夫婦関係の研究は、子どもへの影響性を検討した研究は少ない一方で、夫婦を対象とした研究は比較的多くある（e.g. 伊藤他, 2014）。夫婦を対象とした研究がなされる中で、夫婦が自身の関係性ややりとりについて評定する尺度が複数開発されてきた。尺度の例としては、夫婦間コミュニケーション態度尺度（平山・柏木, 2001）や結婚コミットメント尺度（伊藤・相良, 2015）、夫婦の愛情尺度（伊藤・相良, 2012）などがある。これらの夫婦関係に関わる尺度は、わが国の夫婦関係のあり方を検討する上で参考になると考えられる。

しかし、これらの尺度は、子どもへの影響性を検討することを目的に作成されたものでないため、子どもへの視点は不足している。両親関係の子どもへの影響性の研究は、両親関係に対する子どもの受けとめ方を把握することが重要である。したがって、当分野の研究において、両親関係のあり方を検討する上で、夫婦当事者の視点からの検討だけでなく、子どもの視点から検討することが重要であると考えられる。

しかし、これまで両親関係のあり方について、子どもの視点からの検討はほとんどなされてこなかった。そこで、本研究は、子どもの視点から両親関係のあり方を検討するために、子どもからみた両親間のやりとりについて検討する。また、子どもからみた両親間のやりとりを検討することで、わが国の両親関係のあり方についても探っていく。

欧米でも、これまで両親間葛藤に焦点があてられてきたため、子どもの視点からみた両親関係の葛藤以外の側面については、体系的な枠組みはなく、子どもが評定する尺度もほとんどない。したがって、本研究は、子どもからみた両親間のやりとりについて探索的に検討を行うこととする。

## ポジティブな両親関係の検討の必要性

これまでの国内外の先行研究の問題として、口論や暴力などの外顯的な両親間葛藤ばかりが焦点化されて、両親関係のポジティブな側面の影響が検討されてこなかったことがあげられる。しかし、両親間葛藤と同じくらいに、両親間の情緒的交流の欠如は子どもへの影響性が大きいことが示唆されている（Cummings et al., 2000 松浦訳 2006）。また、最近では、保護要因の観点からも、両親関係のポジティブな側面が子どもの適応へ与える影響を検討することが求められている（Vaez, Indran, Abdollahi, Juhari, & Mansor, 2015）。

上述した通り、昨今は、両親間の親密性など、両親間葛藤以外の側面からみる関係性の質の重要性が再認識されるようになってきているが、実証的な研究はきわめて少なく、ポジティブな両親関係を測定する子ども評定の尺度はほとんど見当たらない。

そこで、本研究は、両親関係のポジティブな側面として、両親間の情緒的交流を取りあげて、両親間交流尺度を作成することを目的とする。本研究では、両親間の情緒的交流を「両親間または両親を含む家族で行われる、平常時にみられるポジティブ・ニュートラルなやりとりや行動」と操作的に定義して検討を行う。

## 本研究の目的

以上をまとめると、本研究の第一の目的は、子どもの視点から両親関係のあり方を検討するために、子どもからみた両親間のやりとりを探索的に検討することである（研究1）。第二の目的は、子どもからみた両親間の情緒的交流を測定する両親間交流尺度の作成をすることである（研究2）。なお、本研究は、認知発達により両親関係のある程度、客観的に認識できる青年期の子どもを対象とする。本研究では、中学生から高校生を対象となった。

研究1は、大学生を対象に、子ども時代の両親間のやりとりについて回顧調査を行う。本研究で対象とした中学生、高校生は、両親間のやりとりの言語化を十分にできない可能性や、回答の負担が大きい可能性がある。そのため、研究1では言語化が可能な年齢である大学生を対象とした。得られた結果は、KJ法を援用してカテゴリに分類する。研究2は、研究1の結果に基づいて、両親間交流尺度の作成を行う。作成した尺度は、青年を対象とした質問紙調査により、信頼性と妥当性の検討を行う。

## 研究 1

**目的** 子どもからみた両親間のやりとりを探索的に検討する。

**方法** 大学生を対象に、子ども時代の両親間のやりとりについての自由記述を収集した。2018年10月から11月にかけて、関東圏の国立大学1校で自由記述式の質問紙調査と半構造化面接調査を行った。質問紙調査は、調査対象者のうち、現在両親と居住している者、または過去に両親との居住経験がある者を分析対象とした。その結果、質問紙調査の分析対象者は大学生99名（平均年齢19.04歳、 $SD=1.93$ ；男子74名、女子25名）であった。面接調査は、両親との居住経験がある者を対象として行い、大学生5名（平均年齢19.40歳、 $SD=0.80$ ；女子5名）が分析対象者となった。なお、本調査は著者らの所属大学の人間系研究倫理委員会の承認を受けて実施された。

**調査内容** ①個人属性：学年、年齢、性別について記入を求めた。また、両親との居住経験と、子ども時代の両親の就業形態について、選択肢の中から回答を求めた。

②両親とのやりとり：「子ども時代のご両親のや

りとりを思い出してください。…ご両親が(a)仲が悪い時、(b)仲がよい時、(c)普段時にどのようなやりとりをしていたかをお尋ねします。具体的な両親間のやりとりをお書きください。」と教示し、(a)、(b)、(c)それぞれについて自由記述を求めた。さらに、(a)、(b)、(c)以外にも両親のやりとりについて記入したいことがあれば、それについて自由記述をするよう求めた。面接調査では、記入してもらった自由記述について詳しい聞き取りを行った。

**結果** 両親間のやりとりについて、質問紙調査と面接調査の分析対象者から523の記述が得られた。これらの記述を第一著者および心理学を専攻する大学生5名の計6名により、KJ法を援用して分類した。分類結果が妥当であるかについて、心理学を専門とする大学教員の第二著者により確認された。

最終的に、抽出されたカテゴリは、ポジティブ・ニュートラルなやりとりと、ネガティブ・対立的やりとりとしてまとめられた。ポジティブ・ニュートラルなやりとりは5のカテゴリ（相手への好意的表出、サポート、日常的な会話・やりとり、外出・イベント、同じ空間で過ごす）、ネガティブ・対立的やりとりは5のカテゴリ（激しい攻撃・直接的な攻撃、

Table 1  
収集データの分類結果（ポジティブ・ニュートラルなやりとり）

カテゴリ (大)	カテゴリ (中)	カテゴリ (小)	数
相手への好意的表出 (6.5%)		お祝い・プレゼント	6
		感謝	10
		褒める	5
サポート (17.0%)	情緒的および 道具的サポート (8.0%)	マッサージ	3
		相手を労わって家事を手伝う その他	22 1
	情緒的サポート (6.2%)	相手を労わる	12
		愚痴・話を聴く	8
道具的サポート (2.8%)	助言	3	
	行動的援助	6	
日常的な会話・ やりとり (63.3%)	楽しいやりとり (17.9%)	楽しく会話	47
		遊び／戯れ	11
	日常的やりとり (27.5%)	見送り・出迎え	14
		あいさつ	8
		とりとめのない話	48
		事務的やりとり	19
会話・話し合い (17.9%)	子どもの話	16	
	家の話	12	
	仕事の話	18	
	その他	12	
外出・イベント (4.9%)		イベント（特別なイベント、旅行・レジャー等）	11
		些細なお出かけ（普段の買い物・食事等）	5
同じ空間で過ごす (8.3%)		家で一緒に食事	10
		その他	17



静かな攻撃・関係性攻撃、対立的なやりとり、状態・雰囲気悪さ、その他)に分けられた (Table 1, 2)。

**考察** 調査の結果から得られた両親間のやりとりについて、両親関係に関わる既存の尺度や、先行研究で指摘されてきた両親関係の側面が見出された。その一方で、これまであまり検討されてこなかった両親関係の側面も見出された。

まず、ポジティブ・ニュートラルなやりとりについてみていく。見出された多くのカテゴリで、既存の尺度に含まれる内容が見受けられた。例えば、カテゴリの相手への好意的表出や、サポートは、伊藤・相良 (2012) の夫婦間の愛情尺度が測定する夫婦間の情緒的側面 (配偶者への配慮, 関心, サポートなど) にみられる内容である。また、夫婦関係の側面として指摘されているコミュニケーションや、

共同活動、何かを一緒に行う頻度などの側面 (伊藤他, 2014) にあたる内容もみられた。夫婦間のコミュニケーションは、カテゴリの日常的な会話・やりとりにあたる内容であり、共同活動や何かを一緒に行う側面は、カテゴリの外出・イベントや同じ空間で過ごすにあたる内容である。以上より、子どもからみた両親間のやりとりはある程度、これまでの夫婦関係に関わる研究で指摘されてきた夫婦関係の諸側面と共通することが示された。

ポジティブ・ニュートラルなやりとりの中で、出現数が最も多かったのが、日常的な会話・やりとりであった。子どもの視点からみた場合、両親間の何気ない日常的なやりとりが子どもにとって最も身近で認知しやすいものであると考えられる。わが国の夫婦間葛藤のあり方を検討した川島 (2013) は、あいさつなどの日常的な行動が夫婦関係にとって重要

Table 2  
収集データの分類結果 (ネガティブ・対立的やりとり)

カテゴリ (大)	カテゴリ (中)	カテゴリ (小)	数	
激しい攻撃・直接的な攻撃 (38.7%)	身体的攻撃 (1.5%)	暴力	3	
		言語的攻撃 (27.6%)	暴言	1
			激情的な口調, 怒鳴る	26
			責める	5
			悪口を言う	7
			嫌み	11
			陰口	5
		不満の表出 (5.5%)	相手への不満	9
			親戚への不満	2
		その他 (4.0%)	モノへ当たる	5
		嫌がらせ	2	
		相手を閉め出す	1	
静かな攻撃・関係性攻撃 (20.6%)	通常行動の拒否 (1.5%)	ご飯を作らない・食べない	3	
	冷遇 (14.6%)	そっけない, いい加減な態度	5	
		冷たくする	5	
		無視	19	
	相手から離れる (4.5%)	相手を拒否して部屋にこもる	3	
	相手と距離をとるため家を出る	6		
対立的なやりとり (18.6%)	離婚の話 (1.0%)	離婚の話	2	
	建設的な口論 (1.5%)	建設的な口論, 議論	3	
	破壊的な口論 (16.1%)	破壊的な口論	28	
		揉める	4	
状態・雰囲気悪さ (19.6%)	不機嫌さの表出 (8.0%)	不機嫌になる	9	
		相手にいら立つ	4	
		きつくなる	3	
	雰囲気悪さ (11.6%)	会話がなくなる	5	
		雰囲気が悪くなる	4	
	非情緒的 (元々)	14		
その他 (2.5%)		一方的な会話	2	
		泣く	2	
		謝る	1	

であることを示した。子どもにとっても同様に、両親間の日常的なやりとりは重要であると考えられる。両親間の日常的なやりとりは、子どもにとって認知しやすいものであり、子どもが両親関係を評価する上で重要な要素になると推測される。

また、外出・イベントや同じ空間で過ごすという、相手への直接的な行為ではない内容を示すカテゴリが見出された。これらのカテゴリは、夫婦の共同活動や何かを一緒に行う側面（伊藤他，2014）を表している。子どもにとって、目に見えるやりとりがなくても、両親が何かを一緒にする、同じ空間で過ごしているという共通性を感じることは、子どもが良好な両親関係を認識する上で重要な要素であるかもしれない。

また、カテゴリの多くの記述で、両親だけでなく、子どもも含めた家族の構成員でそれらのやりとりを行うという記述がみられた。例えば、会話や外出は子どもも含めて家族で行うという記述があげられる。このことから、ポジティブ・ニュートラルなやりとりは、両親だけでなく、子ども自身も加わって行う場合が多いと推測される。反対に、両親の二者だけで行う恋愛なやりとり、例えば「デートをする」などの記述はきわめて少数であった。両親の二者だけのやりとりより、子どもを含めたやりとりの記述が多くみられた背景には、わが国の夫婦関係より親子関係を重視する家族風土が関係しているかもしれない（大野，2015）。また、青年期の子どもをもつ年代と想定される中年期の夫婦関係において、その関係の良好さは、情熱的な愛情関係で測るより、相互の信頼や思いやりを基盤とする情緒的な関係で測るほうが適切であるという（相良他，2014）。この点は、子どもからみた場合も同様であり、両親間のやりとりを測る場合、両親間の恋愛なやりとりを尋ねることは適切でない可能性がある。以上より、両親間の情緒的な交流は、子どもも含めて行われることが多いと予想されるため、両親間のやりとりに関わる尺度を作る場合は、この点を考慮することが求められる。

次に、ネガティブ・対立的やりとりについてみていく。当分野の研究で従来扱われてきた、暴力や口論などの外顕的な両親間葛藤の要素がみられた一方で、直接的な攻撃として表明されない、静かな攻撃や関係性攻撃の要素も見出された。このことから、子どもは、外顕的な葛藤のやりとりだけでなく、無視などの両親間の静かな攻撃や関係性攻撃も認知していることがうかがえた。これまで両親間の直接的でない攻撃が子どもにおよぼす影響の検討はほとんどなされてこなかった。しかし、無視や非言語的葛

藤に対しても、子どもは強く影響を受けることが指摘されている（Cummings et al., 2000 松浦訳 2006）。本研究でも子どもは両親間の静かな攻撃や関係性攻撃も認知していることが示された。これらのことから、両親間の静かな攻撃や関係性攻撃が子どもの適応へ与える影響も検討する必要があると考えられる。

また、両親関係の状態や雰囲気悪さのカテゴリも見出された。これらのカテゴリは、相手へ向けられた明らかな行為ではないが、その背景には相手に対する不満や攻撃が関係している可能性がある。このような明らかな行為ではない、両親の状態や雰囲気の側面も、子どもは十分に認知し、両親関係を評価する重要な要素になることが示唆された。さらに、状態や雰囲気悪さのカテゴリの中には、一時的に状態や雰囲気が悪くなったのではなく、両親が元々非情緒的な関係であるという記述がみられた。これらの記述は、わが国独自の夫婦関係として指摘されている「家庭内別居」（大野，2015）の実態があることを示唆するものであると考えられる。

これまでの研究では、両親関係の側面の中で両親間葛藤に焦点が当てられ、両親間葛藤の子どもへの影響性が検討されることが主であった。しかし、本調査の結果から、子どもは、従来取り扱われてきた葛藤以外にも、様々な両親関係の側面を認知していることがうかがえた。例として、明らかな行為ではない、共同性や状態、雰囲気といった側面があげられる。これらの側面は、当分野の研究でこれまであまり検討されてこなかった。一見すると外から捉えにくいと思われるこれらの側面も、子どもは敏感に察知しており、子どもが両親関係を評価する上で重要な要素になりうると考えられる。

本調査により、子どもは両親間の様々なやりとりを認知していることが示唆されたが、どの両親間のやりとりが、子どもの両親関係の評価や子どもの適応にとって、重要であるかは明らかになっていない。今後は、両親間のやりとりや関係性の側面の体系化を進めることに加えて、どの側面が子どもへ影響を与えるかについても検討していくことが必要であろう。

本研究の限界として、大学生を対象とした回顧調査であったことがあげられる。今後は、回答の負担などの配慮を行った上で、両親関係の影響を受けやすいとされる青年期の子どもに調査を行うことが有用であろう。その他の限界として、対象者の両親間葛藤の程度を客観的指標で測定しなかったことがあげられる。そのため、対象者の両親間葛藤の程度には偏りがみられる可能性がある。今後は、高葛藤の

家庭など、様々な家庭のサンプルからデータを収集し、どのような両親間のやりとりがみられるか検討することが重要であると考えられる。

両親関係は様々な側面があり、両親間のやりとりを捉えるための次元は様々にある。また、両親間のやりとりは、個人の行為としてではなく、二者間のパターンとしても捉えるべきであるという指摘もある(横谷・長谷川, 2014)。これらのことから、両親間のやりとりを一つの基準で捉えることは非常に難しいと考えられる。本研究の両親間のやりとりの分類はあくまで探索的なものであり、今後どのような分類の仕方が適当であるか精査していく必要がある。

## 研究 2

研究1のポジティブ・ニュートラルなやりとりの結果に基づいて、両親間交流尺度の作成を行う。

まず、尺度項目の選定と修正を目的に、大学生を対象に予備調査を行う。次に、実際の対象として想定している青年を対象に予備調査を行い、尺度項目を決定する。最後に、本調査を実施し、両親間交流尺度の信頼性と妥当性の検討を行う。

### 予備調査 1

**目的** 試作版の両親間交流尺度を大学生に実施し、尺度の項目の選定と修正を行う。

**方法** 2018年12月に、関東圏の国立大学1校の大学生に質問紙調査を行った。調査対象者のうち、現在両親と居住している者、または過去に両親との居住経験がある者を分析対象とした。また、回答の欠損が著しいなどの回答の不備がある者を分析から除外した。その結果、分析対象者は大学生233名(平均年齢19.73歳、 $SD=1.19$ ; 男子97名、女子135名、不明1名)であった。

**調査内容** ①個人属性：学年、年齢、性別について記入を求めた。また、両親との居住経験と、子ども時代の両親の就業形態についてについて把握するために、選択肢の中から回答を求めた。

②両親間交流：研究1で得られた、両親間のポジティブ・ニュートラルなやりとりの分類結果(Table 1)をもとに、両親間交流尺度の試作版として99項目を作成した。全項目のうち、41項目は両親間の双方が一緒に行うやりとりについての項目である。残りの58項目は、母親が父親に対して行う行為についての29項目と、父親が母親に対して行う行為についての29項目からなる。これらの各29項目は、母親と父親の得点の比較を行うために、母親と父親それぞれ

で同じ内容になっている。調査対象者に、子ども時代の両親間のやりとりを回顧してもらい、各項目について、「1：まったくなかった」から「4：よくあった」の4件法で回答を求めた。

**倫理的配慮** 本調査は著者らの所属大学の人間系研究倫理委員会の承認を受けて実施された。調査対象者へは、調査への回答の自由意志が尊重されることや、回答を止めることで不利益を受けることはないこと、回答は研究以外の目的では使用せず、個人が分かる形で公表しないことなどを質問紙のフェイスシートおよび口頭で説明した。また、単親家庭など回答が難しいと予想される調査対象者への配慮として、質問紙の最初のページで調査内容には家族や両親について尋ねる項目があることを断り、回答が難しいと感じた場合、家族に関わらない内容のページへ飛ばすよう教示した。

**結果と考察** 両親間交流尺度について、分析対象者の指摘などから、質問の意味が分かりにくい、もしくは内容が類似していると判断された項目は、削除または文面を修正した。また、一つの選択肢への回答の過度な偏りや、両親の就業形態による得点の有意差などを確認し、偏りがみられた項目は削除した。また、多くの項目で天井効果がみられたが、天井効果による項目の削除は行わなかった。尺度の内容は一般的な夫婦によくみられるやりとりや行動であり、分布の偏りが想定されるため、この基準での項目の削除は適当でないと判断した。

修正した項目は、第二著者とは別の、心理学を専門とする大学教員により内容的妥当性が確認された。この内容的妥当性の確認を受けて項目を修正した結果、両親間交流尺度は45項目になった。

### 予備調査 2

**目的** 両親間交流尺度を実際の対象として想定している青年に実施し、尺度の項目の選定を行う。

**方法** 関東圏の公立学校と私立学校に調査を依頼し、承諾を得た中学校2校、高等学校1校で、2019年6月から2020年2月にかけて質問紙調査を実施した。調査は、担当教員による各学級での一斉配布形式で実施され、担当教員はこちらが用意した調査実施手順書にそって調査を実施した。回答は全て無記名で行われた。調査対象者のうち、現在両親と居住している者、または過去1年以内に両親との居住経験がある者を分析対象者とし、回答の欠損が著しいなどの回答の不備がある者を分析から除外した。その結果、分析対象者は12-17歳の372名(中学生148名、高校生224名; 男子181名、女子186名、不明5名)となり、平均年齢は14.84歳( $SD=1.42$ )であっ

た。

**調査内容** ①個人属性：学年、年齢、性別について記入を求めた。また、両親との居住経験について把握するために、選択肢の中から回答を求めた。

②両親間交流：予備調査1の結果をもとに修正された45項目を使用した。全項目のうち、21項目は両親間の双方が一緒に行うやりとりについての項目で、残りの24項目は、一方の親が一方の親に対して行為についての項目からなる。「あなたのお父さんとお母さんの日ごろのやりとりについてききます。お父さんとお母さんの間で次のようなことはどの程度しますか」と教示し、それぞれの項目について、「1：まったくない」、「2：まれにある」、「3：ときどきある」、「4：よくある」の4件法で回答を求めた。

**倫理的配慮** 予備調査1と同様であった。

**結果と考察** 両親間交流尺度の項目をクラスター分析にかけ、項目内容が類似している8項目を削除した。残りの37項目について、重み付けのない最小二乗法による因子分析を行った。固有値の減衰状況(15.01, 2.85, 1.68, 1.28, 1.21…)から、2因子構造を採用した。2因子に固定し、再度、重み付けのない最小二乗法とプロマックス回転による因子分析を行った。そして、因子負荷量が0.35未満、もしくは、共通性が0.40未満であった11項目を削除した。

以上の分析を経て、両親間交流尺度は26項目になった(Table 3)。第1因子は、一方の親が一方の親に対して行う情緒的または道具的サポートの内容からなることから両親間サポートと命名した。第2因子は、両親間の双方が一緒に行う日常的なやりとりの内容であることから、日常的交流と命名した。

Table 3  
両親間交流尺度の探索的因子分析の結果

項目番号	項目	I	II
I. 両親間サポート ( $\alpha = .95/.95$ )			
5M	相手がこまっているときに、アドバイスをしてあげる	.95	-.23
2M	相手にいやなことがあったり、おちこんでいるときに、なぐさめてあげる	.90	-.08
4M	相手のぐちをやさしくきいてあげる	.89	-.16
5F	相手がこまっているときに、アドバイスをしてあげる	.78	.00
1M	相手の体調がわるいと、「だいじょうぶ?」と心配してこえをかける	.76	-.05
2F	相手にいやなことがあったり、おちこんでいるときに、なぐさめてあげる	.74	.10
7M	相手がこまっているときに、てだすけをする	.71	.05
4F	相手のぐちをやさしくきいてあげる	.70	.06
11M	相手のいいところをほめる	.69	.09
1F	相手の体調がわるいと、「だいじょうぶ?」と心配してこえをかける	.67	.10
9M	相手にいいことがあると「おめでとう」と言ってお祝いする	.62	.16
11F	相手のいいところをほめる	.57	.25
7F	相手がこまっているときに、てだすけをする	.54	.28
9F	相手にいいことがあると「おめでとう」と言ってお祝いする	.52	.31
II. 日常的交流 ( $\alpha = .91/.90$ )			
31	お父さんとお母さんは、食事をとりながらおしゃべりをする	-.07	.84
20	お父さんとお母さんは、たのしそうにおしゃべりをする	.04	.80
34	お父さんとお母さんは、テレビをみながらそのテレビのはなしをする	-.08	.72
23	お父さんとお母さんの二人、または家族で買いものにかける	-.10	.71
33	お父さんとお母さんは、家にいるときはおなじ部屋ですごす	-.11	.69
32	お父さんとお母さんの二人、または家族であそびや旅行にかける	-.05	.66
24	お父さんとお母さんは、おたがいかかわろうとしない ※	-.04	-.63
14	お父さんとお母さんは、たのしそうにふざけあう	.08	.61
21	お父さんとお母さんは、おでかけや旅行の計画についてはなしをする	.13	.60
22	お父さんとお母さんは、仕事や家であったできごとについておたがいに報告しあう	.20	.55
17	お父さんとお母さんは、その日の予定を共有する	.18	.53
16	お父さんとお母さんは、「おはよう」、「いってらっしゃい」などのあいさつをする	.22	.48
累積寄与率 (%)		48.84	57.32
因子間相関		.70	

注) ※逆転項目。項目番号にMがつく項目は、母親が父親(相手)に対してする行為を、項目番号にFがつく項目は、父親が母親(相手)に対してする行為を尋ねている。 $\alpha$ 係数は、左側が予備調査2の値、右側が本調査の値である。



各因子について、Cronbach の $\alpha$ 係数を算出した結果、第1因子は $\alpha = .95$ 、第2因子は $\alpha = .91$ であり、十分な内的整合性があることが確認された。

## 本調査

**目的** 両親間交流尺度の信頼性と妥当性を検討する。信頼性については、 $\alpha$ 係数により検討する。妥当性については、基準関連変数との相関分析により検討する。両親関係が良好であるほど、両親間の情緒的交流は多くなされ、葛藤は少ないと予想される。したがって、両親間交流尺度は、両親間葛藤とは負の相関、両親関係満足度と両親間の愛情とは正の相関であることが想定される。

また、家庭内の居心地の良さや子どもの適応との関連もみることで、両親間の情緒的交流が子どもにどのような影響を与えるかも探索的に検討する。

**方法** 関東圏の公立学校と私立学校に調査を依頼し、承諾を得た中学校1校、高等学校1校で、2020年2月に質問紙調査を実施した。調査の実施方法と分析対象者の基準は、予備調査2と同様であった。分析対象者は12-16歳の219名(中学生72名、高校生147名；男子105名、女子108名、不明6名)となり、平均年齢は15.26歳( $SD = 1.06$ )であった。

**調査内容** ①個人属性：予備調査2と同様の内容であった。

②両親間交流：予備調査2の結果をもとに完成した両親間交流尺度を使用した。両親間サポート14項目と日常的交流12項目の下位尺度から構成される。両親間サポートは、一方の親がもう一方の親に対して行う行為についての内容であり、母親と父親それぞれについて同じ内容の項目からなる。教示と回答方法は予備調査2と同様であった。

③両親間葛藤：川島他(2008)の両親間葛藤認知尺度の「葛藤深刻さ」13項目のうち12項目を使用した。各項目について、「1：ちがう」から「4：そのとおり」の4件法で回答を求めた。

④両親関係満足度：諸井(1998)の子ども用夫婦関係満足度尺度の6項目を使用した。各項目について、「1：ほとんどあてはまらない」から「4：かなりあてはまる」の4件法で回答を求めた。

⑤両親間の愛情：高橋(1998)の子どもの評価による両親間の関係尺度の「両親間の愛情」の7項目を使用した。各項目について、「1：そう思わない」から「4：そう思う」の4件法で回答を求めた。

⑥家庭内の居心地の良さ：宮坂(2014)の子どもが認知した家族関係認知尺度の「家庭内の居心地の良さ」13項目のうち12項目を使用した。各項目について、「1：全然あてはまらない」から「5：よくあてはまる」の5件法で回答を求めた。

⑦不安/抑うつ：子どもの適応として、不安/抑うつを取りあげた。倉本他(1999)のユース・セルフレポートの「不安/抑うつ」のうち16項目のうち14項目を使用した。本調査では、回答者への心理的負担を考慮し、自傷や自殺に関する2項目は除外した。各項目について、「0：あてはまらない」から「2：よくあてはまる」の3件法で回答を求めた。

**倫理的配慮** 予備調査1、2と同様であった。

**結果と考察** まず、両親間交流尺度の信頼性を検討するため、各下位尺度について $\alpha$ 係数を算出した。その結果、両親間サポートは $\alpha = .95$ 、日常的交流は $\alpha = .90$ であり、一定の信頼性があることが確認された。

次に、両親間交流尺度の妥当性を検討するために、各下位尺度と他尺度とのPearsonの積率相関係数を算出した(Table 4)。分析に使用した全ての尺度は、十分な $\alpha$ 係数の値が得られ、一定の内的整合性が確認された(Table 4)。

相関分析の結果、両親間交流尺度の両下位尺度において、両親間葛藤とは有意な負の相関( $r = -.43$ ;  $r = -.42$ )、両親関係満足度( $r = .61$ ;  $r = .72$ )と両親間の愛情( $r = .64$ ;  $r = .69$ )とは有意な正の相関がみられた。つまり、子どもが両親間のサポートや日常

Table 4  
両親間交流尺度と関連変数との相関

	2.	3.	4.	5.	6.	7.
1. 両親間サポート	.72***	-.43***	.61***	.64***	.58***	-.12†
2. 日常的交流		-.42***	.72***	.69***	.66***	-.17*
3. 両親間葛藤 ( $\alpha = .87$ )			-.67***	-.48***	-.51***	.32***
4. 夫婦関係満足度 ( $\alpha = .95$ )				.72***	.67***	-.18**
5. 夫婦間の愛情 ( $\alpha = .91$ )					.57***	-.10
6. 家庭内の居心地の良さ ( $\alpha = .93$ )						-.25***
7. 不安/抑うつ ( $\alpha = .85$ )						

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

的交流を認知するほど、両親間葛藤は低く認知され、両親関係の良好性を高く評価することが示された。これらの結果は仮説通りであり、両親間交流尺度に一定の妥当性があることが確認された。

また、両下位尺度において、家庭内の居心地の良さは有意な正の相関がみられた ( $r = .58$ ;  $r = .66$ )。不安 / 抑うつとは、両親間サポートで有意傾向の弱い負の相関 ( $r = -.12$ ,  $p < .10$ )、日常的交流で有意な弱い負の相関がみられた ( $r = -.17$ ,  $p < .05$ )。このことから、子どもは両親間のサポートや日常的交流を認知するほど、家庭内の居心地の良さを感じやすいことや、不安 / 抑うつが低くなることが示唆された。

### 総合考察

本研究は、研究1では、子どもの視点からみた両親関係のあり方を検討するために、大学生を対象とした回顧調査を行い、子どもからみた両親間のやりとりを探索的に検討した。研究2では、研究1の結果をもとに両親間交流尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行った。

研究1の結果から見出された両親間のやりとりについて、従来の研究で取り扱われてきた両親関係の側面にあたる内容がみられた一方で、これまで着目されてこなかった側面の内容もみられた。本研究から、子どもは、従来取り扱われてきた両親間葛藤の側面以外にも、様々な両親間のやりとりを認知しており、認知した両親間のやりとりが子どもの両親関係の受けとめ方に影響していることが示唆された。近年は、両親間葛藤以外の両親関係の全般的な質が子どもの適応に与える影響が注目されている。今後は、本研究で見出されたような両親間のやりとりが、子どもの両親関係の受けとめ方や、適応にどのように影響するかを検討する必要がある。本研究は、回顧調査であるなどの点で限界があったものの、これまで子どもの視点から両親関係のあり方を検討した研究は見当たらず、本研究は意義があったと考えられる。今後は、上記の限界点を含めて、さらなる検討が進むことが期待される。

研究2では、両親間の情緒的交流を測定する両親間交流尺度が作成され、尺度に一定の信頼性と妥当性があることが確認された。これまで、両親関係のポジティブな側面が子どもへ与える影響はほとんど検討されてこなかった。しかし、本研究により、両親間の情緒的交流を認知することは、子どもの適応と関連することが示唆され、両親関係のポジティブな側面の影響性を検討する必要性が示された。昨今は、夫婦のコミュニケーション不全が問題となって

いることから（平山・柏木，2004）、両親間の情緒的交流の程度が子どもの適応にどのような影響を与えるかの検討は社会的にも重要であると考えられる。

ただし、両親間交流尺度について、さらなる検討が必要な点が見られた。第一に、下位尺度の弁別性である。下位尺度の夫婦間サポートと日常的交流との相関は高く、両下位尺度は他尺度と同様の相関パターンを示した。今後は、両者に機能の違いがあるかなど、その弁別性についてさらなる検討が求められる。

第二に、適応との関連についてである。本研究は適応として、不安 / 抑うつを扱ったが、両親間交流との相関は弱かった。良好な両親関係の認知と自尊心の高さには関連があることから（前島・小口，2001）、両親間交流はポジティブな適応の側面と関連する可能性がある。今後は他の適応の指標との関連をみる必要がある。また、両親間交流は家庭内の居心地の良さに関連していたことから、子どもの適応へ間接的に影響するプロセスも想定される。両親間の情緒的交流がどのように子どもの適応へ影響するかについて、さらなる検討が必要である。

その他に検討すべき点として、回答の選択肢があげられる。両親間交流尺度は4件法であり、項目の多くで天井効果がみられた。尺度の内容から、このような分布の偏りは想定していたが、4件法から5件法にするなどの修正により分布の偏りがある程度なだらかになる可能性がある。今後、この点についてもさらなる検討をする必要がある。

また、本研究の限界として、対象者の年齢やサンプル数の少なさがあげられる。本研究は青年を対象としたが、当分野で青年を対象とする先行研究の多くは、小学校中学年から高校生くらいを対象としている。本研究の対象は中高生のみであり、サンプル数も十分ではなかった。今後は、小学生も対象に含めてサンプル数を増やし、検討をする必要がある。

上記のような課題や限界が存在するものの、従来検討がされてこなかった、子どもからみた両親間のやりとりの検討や、両親間の情緒的交流を測定する両親間交流尺度の作成を行った本研究は意義があったと考えられる。今後、上記の課題や限界を含めてさらなる検討を行うことが求められる。

### 謝 辞

本研究の調査にご協力くださいました生徒・学生の皆さまに心から感謝申し上げます。また、調査の実施にあたり、学校の先生方に多大なるご協力をい

いただきました。この場をお借りして心から感謝申し上げます。

## 引用文献

- Cummings, E. M., Davies, P. T., & Campbell, S. B. (2000). *Developmental Psychopathology and Family Process: Theory, Research, and Clinical Implications*. New York: The Guilford Press. (カミングス, E. M., デイヴィーズ, P. T., & キャンベル, S. B. 松浦素子 (訳) 子どもの発達と夫婦のサブシステム 菅原ますみ (監訳) (2006). 発達精神病理学——子どもの精神病理の発達と家族関係—— ミネルヴァ書房)
- Cummings, E. M., Goeke-Morey, M. C., & Papp, L. M. (2003). Children's responses to everyday marital conflict tactics in the home. *Child Development, 74*, 1918-1929.
- Davies, P. T., & Cummings, E. M. (1994). Marital conflict and child adjustment: An emotional security hypothesis. *Psychological Bulletin, 116*, 387-411.
- Davies, P. T., Martin, M. J., & Sturge-Apple, M. L. (2016). Emotional security theory and developmental psychopathology. In D. Cicchetti (Ed.), *Third Edition Developmental Psychopathology: Theory and Method* (Vol 1., pp. 199-264). New Jersey: Wiley.
- Grych, J. H., & Fincham, F. D. (1990). Marital conflict and children's adjustment: A cognitive-contextual framework. *Psychological bulletin, 108*, 267-290.
- 平山順子・柏木恵子 (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？ 発達心理学研究, 12, 216-227.
- 平山順子・柏木恵子 (2004). 中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連 発達心理学研究, 15, 89-100.
- 伊藤裕子・池田政子・相良順子 (2014). 夫婦関係と心理的健康 子育て期から高齢期まで ナカニシヤ出版.
- 伊藤裕子・相良順子 (2012). 愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討——中高年期夫婦を対象に—— 心理学研究, 83, 211-216.
- 伊藤裕子・相良順子 (2015). 結婚コミットメント尺度の作成——中高年期夫婦を対象に—— 心理学研究, 86, 42-48.
- 柏木恵子・平山順子 (2003). 結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性——妻はなぜ不満か—— 心理学研究, 74, 122-130.
- 川島亜紀子 (2013). 『Yahoo! 知恵袋』に見る夫婦間葛藤解決方略 千葉大学教育学部研究紀要, 61, 185-191.
- 川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井 厚・伊藤教子 (2008). 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連 教育心理学研究, 56, 353-363.
- 警察庁 (2019). 平成30年における少年非行, 児童虐待及び子供の性被害の状況 警察庁 Retrieved from [https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hikou\\_gyakutai\\_sakusyu/H30.pdf](https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hikou_gyakutai_sakusyu/H30.pdf) (2019年11月16日)
- 厚生労働省 (2020). 平成30年人口動態統計 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/houkoku18/dl/all.pdf> (2020年10月18日)
- 倉本英彦・上林靖子・中田洋二郎・福井知美・向井隆代・根岸敬矩 (1999). Youth Self Report (YSR). 日本語版の標準化の試み——YSR 問題因子尺度を中心に—— 児童青年精神医学とその近接領域, 40, 329-344.
- 前島芳名子・小口孝司 (2001). 父母の不和が子どもの自尊心, 情緒安定性ならびに攻撃性に及ぼす影響——父は情緒に, 母は行動に—— 家族心理学研究, 15, 45-56.
- 宮坂 遼 (2014). 子どもが認知した家族関係と子どもの抑うつ傾向との関連 心理臨床学研究, 31, 979-987.
- 諸井克英 (1998). 子どもの眼からみた家庭内労働の分担の公平性——女子青年の場合 家族心理学研究, 11, 69-81.
- 大野愛実 (2015). 青年の認知からみた両親間不和：CPIC 尺度の因子構造と研究での使用方法に着目した文献比較 お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 17, 65-76.
- 高橋直美 (1998). 両親間および親子間の関係と子どもの精神的健康との関連について 家族心理学研究, 12, 109-123.
- Vaez, E., Indran, R., Abdollahi, A., Juhari, R., & Mansor, M. (2015). How marital relations affect child behavior: review of recent research. *Vulnerable Children and Youth Studies, 10*, 321-336.
- van Eldic, W. M., de Haan, A. D., Parry, L. Q., Davies, P. T., Luijk, M.P., Arends, L. R., & Prinzie, P. (2020). The interparental

relationship: Meta-analytic associations with children's maladjustment and responses to interparental conflict. *Psychological Bulletin*, 146, 553-594.

山本倫子・伊藤裕子(2012). 青年期の子どもが認知した夫婦間葛藤と精神的健康との関連 家族心

理学研究, 26, 83-94.

横谷謙次・長谷川啓三(2011). Communication Patterns Questionnaire (CPQ) 日本語版の検討——尺度の信頼性と妥当性—— カウンセリング研究, 44, 244-253.

(受稿9月30日: 受理11月30日)